

王朝文学、理解のカギは漢文学

京都大学は東京・品川にある「京大・東京オフィス」で、連続講演会「東京で学ぶ京大の知」を始めた。朝日新聞社後援。1週間に1回の連続講座で1テーマにつき3回から4回講演する。現役の教授らが日ごろの研究成果を分かりやすく紹介する。最初のテーマは「王朝文学の世界」。初回の11月10日は、和漢比較文学が専門の大谷雅夫・大学院文学研究科教授が「王朝文学と漢文学」について語った。

●漢文学こそ最高峰

「仮名文学が王朝文学の全体かという、決してそうではない。平安時代には、漢文学が文学の中心で、最も高い価値を持つ文学として意識されていた」

大谷教授の話は、「平安時代イコール仮名文学」という「常識」を否定するところから始まった。

例としてあげたのが、平安中期の詩文集「本朝麗藻(ほんちょうれいそう)」。大谷氏自ら「あまり知られておらず、京大の学生に話をしても困ったような顔をされる」という作品だ。



大学院文学研究科 大谷雅夫教授

しかし、本朝麗藻には、文人として知られた一条天皇や紫式部の父とされる藤原為時(ふじわらのためとき)のほか、藤原道長や藤原伊周(ふじわらのこれちか)らの権力者の詩が収められている。大谷氏はこの点を指摘し、「当時の人々の意識としては、『本朝麗藻』に収められた漢詩こそが、時代の第一等の人物が作る、第一等の文学だった」と解説した。「仮名文学との比較では、社会的評価は(仮名文学が高く評価されている)現代と逆だった」と断言した。

●女もすなる漢文学

漢文学の優位を解き明かす大谷氏。講演ではさらに、漢文学が決して男性だけのものではなかった点にも触れた。むしろ、後世に名を残した女性作家について「漢文学

を相当に読みこなし、味わっていたのだろう。そのことを裏書きするかのように、彼女たちの作品には、漢文学の影響がかなりはっきりした形で確認できる」と論じた。

大谷氏が取り上げたのは、「蜻蛉日記(かげろうにつき)」で知られる藤原道綱の母、「源氏物語」の紫式部、「狭衣物語(さごろもものがたり)」の作者とされる源頼国の娘、そして「枕草子」の清少納言の4人の女性作家。それぞれの作品の中で、登場人物が口にした詩句や自然の描写の中に、漢詩にヒントを得たと思われる表現や、従来の日本語にはなかった漢詩特有の言い回しが見られるという。



例えば、「蜻蛉日記」の写本の中にある「散るかつはとよ」という表現。ある説は、これを「花も一(ひと)とき」の誤写と判断し、盛りを過ぎた花のように夫に捨てられて悲しむ心を語る句と理解している。

しかし、大谷氏は、これが漢詩の大家・李白の詩句の「散り

且つは飛ぶ(ちりかつはとぶ)」の引用であると解説した。その李白の詩は「自分だけは帰るところもなく、落ち着きどころがない」と詠っていた気持までもこめた言葉であり、(夫の不倫で)わだかまりを抱える夫のもとには帰らず、さりとして仏門に出家するところまでは踏み出せず、山寺で過ごす主人公の気持ちを語るものとして口ずさまれたのだという。

●「漢詩通」は読者も

さらに、大谷氏はここでもう一点、指摘する。読者の存在だ。「日記といっても、読者を意識した『自叙伝』。読者を意識する以上、読者が分からない詩句を引用するはずがない。当時の読者は、『散り且つは飛ぶ』という詩句だけで李白の詩を意識し、もとの詩句が持っている頼りなさ、心細さを歌った心境を意識できたと言わざるをえない」と結論づけた。読者の理解を前提とした表現は、「源氏物語」でも、白居易の詩句の引用という形でいたるところに見られるという。

講演の締めくくりとして、大谷氏は、漢詩と比較することでまったく違う情景描写になる例を紹介した。「秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたる…」という、「枕草子」の序文だ。

通説では、「山の端」とは、「夕日がさして、山の端に近づいている状態」のことを指す。大谷氏は「夕日に照らされて、山の輪郭がはっきりし、近くに見える」という別の説があると解説。この説については、「山が近づいてみえる現象は、文学表現としての例が少ない」ことが弱点とされるが、大谷氏によると、漢詩には似通った表現が多数存在する。

大谷氏は「仮名文学と漢文学との関係を考えると、現代の古典の理解はあくまで現代風のとらえ方であり、かつての正しい意味を失っている可能性がみえてくる」と語った。



京都大学は2009年秋、首都圏での情報発信の強化を狙って、JR品川駅からほど近い高層ビル「品川インターシティ」A棟の27階に「東京オフィス」を開設しました。大西有三副学長は「東京オフィスをベースに、京大の研究や教育の内容をお知らせするさまざまなイベントを企画しています。京大が持つ知識、知恵がどのようなものか、皆さんにその一端をご披露し、知っていただきたい」と話しています。

講演会は、テーマごとにその専門の教授がコーディネーターとなり、テーマにふさわしい同僚に声をかける形で具体的な演題を決めていきます。第1回の「王朝文学の世界」では、4人の講師が4回にわたって語ります。

(※原稿及び写真は朝日新聞社提供)